白門経友会

中央大学キャンパスは冬を迎えようとしています

オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド開催で行われた白門祭も終わりました。緊急事態宣言が解除され、さまざまな制限が緩められましたが、年度内の授業はほぼこれまで通り遠隔授業と面接授業の併用で実施されており、キャンパスが賑わうのはまだ先になります。

白門経友会では、前号でお知らせしましたように、本年度の定期総会もホームページでの持ち回り審議という形にさせていただき、承認していただきました。ご協力ありがとうございます。

例年ならば定期総会に併せて退職予定の先生に公開記念講演をお願いするところですが、今回はそれに代わり、米田貢先生に寄稿していただきました。

さてこの度、中央大学経済学部の学部長に佐藤拓也先生が就任されました。前学部長の山﨑朗先生はコロナ禍の中での学部運営で大変でしたが、この場を借りてねぎらいの言葉をかけさせていただきます。若い佐藤新学部長には、コロナ禍を超えて経済学部にフレッシュな風を吹き込んでいただきたいと切望いたします。

特別寄稿　公開記念講演に代えて

「研究・家族・人生」

米田　貢

（1）研究生活をふり返る

二〇二二年三月三一日で七〇歳になり退職する米田貢です。一九八四年に助手として関西からやってきて三八年間中央大学でお世話になりました。工藤恒夫学部長時代に経済学部が学部独自のＯＢ会である経友会を他学部に先駆けて結成し、教授会員もお仲間に入れてもらい様々な先輩の皆さんとお付き合いすることができました。今回経友会の会報で、これまでの自分の人生をふり返る良い機会を得たことに感謝申し上げます。

まずは研究生活をふり返ってみます。確かこの会報で何年か前に、私がなぜ経済に関心をもつようになったのかを書かせていただきました。六歳の秋か冬、兄たちがお菓子の取り合いで大喧嘩をし、銭湯から帰ってきた母に見つかりこっぴどく叱られた。その時の母がきった啖呵は、「あんたらのお父さんは、食べ物のことなんかで子供に喧嘩させるような生活はさせてはいないんだ」。我が家は「貧しいんだ」との思い込みが頭から離れない間に、皇太子（後の平成天皇）と美智子さん（庶民出身と言われていた）の豪華絢爛な一連の結婚セレモニーとパレードが何日にもわたってテレビで放映された。その時「この人たちは食べ物のことなんかで喧嘩したことはないのだろうな」と感じたことが、私が、「貧困」問題と向き合うようになった最

初のきっかけだった。

学生時代にマルクス経済学、『資本論』を二年間ほど必死になって学習したが、学生運動に入れ込み過ぎ三年も浪人して大学院に進学した。資本制的蓄積の一般法則である「一方の極における富の蓄積と他方の極における貧困の蓄積」の現代的形態を解明しようと、大学院時代は独占資本主義の歴史と理論、現代の経済権力である金融資本、その日本的形態であった企業集団（一九八〇年代までは六大企業集団と呼ばれていた）の研究を主に行った。金融資本理解のために、資本主義的信用制度の理論と歴史を系統的に学習・研究していたことから、中大経済学部の財政・金融部門の貨幣信用論科目の助手試験を受け、採用された。その後カリキュラム改革の一環として講義科目の系統性を明確にするために、金融部門ではそれまで対抗科目であった二つの金融論をともに金融論Ⅰ（金融の一般理論）に、貨幣信用論を金融論Ⅱ（金融の特殊理論）とした。

大学における教育とは元来研究に基づく教育であり、どのような研究を行うのかは研究者の自由な知的好奇心に委ねられている。だが、私自身は、正直に言って金融分野の研究については、日本中のありとあらゆる金融業界、金融機関が、一九八〇年代中ごろから先を争って不動産金融にのめり込み、投機金融でボロ儲けしたあげく、いざバブルが崩壊すると日銀信用や財政資金（究極的には国民の血税）に救いを求めるのを目の当たりにして、資本主義的な信用制度への研究意欲は萎んでいった。私の唯一の単著『現代日本の金融危機管理体制―日本型TBTF政策の検証―』（中央大学出版会、二〇〇七年）は、もはや日本の金融業が日本経済の健全な発展を担うことはないとの思いから、日本の金融業界の投機的体質と大銀行をToo Big To Failという政治的立場から救済した金融監督当局に対する批判の書としてまとめたものである。もちろん、学生に金融論を教えることによって、それなりの給料をもらっているわけだから、学生教育に手を抜いたことはない。

それ以降の私の経済学に対する主要な問題関心は、アジア・太平洋戦争後、奇跡の成長を果たした日本経済が、一九九〇年代半ば以降、なぜ国際的にみて異常なまでの長期経済停滞に陥っているのかに、集中してきた。一五年余りの研究を通じた私なりの結論は、一言にすれば以下の通りである。日本のグローバル企業は国際競争力の維持・強化のために、市場経済の等価交換原則に反して賃金水準を切り下げ過ぎた。一九九五年の日経連の『新時代の日本的経営』が起点となって、政官財あげて労働力流動化政策が推進され、わずか二〇年間で不安定雇用・時間給で低賃金の非正規労働者が二〇〇〇万人を超えるに至った（その割合は全労働者の約三八％）。その結果、労働者階級全体として、賃金は労働力商品の価値（文化的要素ならびに家族扶養も含めた労働力の再生産費）以下にまで押し下げられた。勤労大衆の消費力の停滞・萎縮が国内生産の停滞をもたらし、さらに、それがグローバル企業主導の新たな雇用収縮、賃金の切り下げを生むという悪循環が生まれた。世界への洪水的輸出で国内の生産と雇用の拡大に貢献した自動車産業や電気・電子機械産業はグローバル化し、もっぱら海外での生産拡大を図るこれらグローバル企業の利益・成長と国民経済の成長・国民生活の向上は両立しえない、むしろ対立する時代に突入している。

（2）家族関係を考える

貧困をこの世から失くしたいという課題意識から始まった私の研究のあり方からして、これまでの私の大学教員としての研究生活は、一貫して労働運動、市民運動、地域運動から刺激を受け、社会の不条理に対する怒りを研究意欲の原動力としてきました。その結果、私の人生は、研究生活と社会運動のなかで多忙を極めてきました。私の奥さん（などという呼び方はしたことがないので）である町子さんとは、私が大学院の浪人時代に結婚をしました。一九八四年に中大に入職するまで、親子ともども（長男の息子の一平はドクター進学後の一九八〇年に生れました）、京都府の小学校の教員をしていた町子さんに養ってもらいました。彼女もまた毎晩学級通信をつくりながら、教員組合やその他の地域・社会活動に参加していたので、お互いに時間の取り合いの夫婦生活を送ってきました。

私たち夫婦の共通の子ども観に基づいているのは言うまでもありませんが、それぞれの活動時間を確保するために、子どもたち（中大に来た一九八四年に長女稍が生れました）には小さい時から何らかの家事を担

わせてきました。小さい時には自然のなかで遊びまわる幸せを実感させる、個性を尊重しつつ、友達との交流のなかで自立的な子供に育てることを、子育ての基本にしてきました。そのかいあって、大学受験に際して、「東京の大学に行くのなら学費は出さない。田舎に行って自然のなかでゆったりとした時間を楽しんで来い」と言ったら、息子は北海道帯広市の大学に、娘は大分県別府市の大学に行き、大学・大学院の六年間で、親からは完全に自立した人格・人間になっていったようです。社会人になってからは、息子（スポーツ好きが高じてスポーツグッズの小売り業の会社に就職、全国を転々としていましたが、政府への出向命令で最後は東京勤務）も、娘（なぜか東京に戻って通信教育で教師免許をとり都内の私立小学校に勤務）も、仕事・職場が気に入ったのか、かなりの仕事人間になりました。でも、幼い頃からの体験がそうさせたのか、両人とも遊び心は失わず、暇を無理やり作っては、スケボー、スノーボード、音楽ライブ、ショッピング、国内外の旅行なども楽しんでいました。私も町子さんも、時折ふらっと顔を見せに来る彼らの近況報告を聞いて、元気にやっているのだなと、安心するだけの普通の家族関係に浸ってきました。

この普通の家族関係が、二〇一八年十一月九日の午前零時頃にかかってきた一平の奥さん（朋美ちゃん）からの電話で一挙に崩れました。一平は、足の骨折が原因でできた血栓が両側の肺動脈を同時に閉塞させた結果、脳に三〇分間血が流れなくなりました。救急隊員と救急病院の医師・看護師の懸命な努力によって、いったん意識が戻らないまま蘇生しましたが、わずか四日間の闘病（うち二日間は高度集中治療室）ののち十一月十三日の早朝にあっけなく逝ってしまいました。

私たち家族は全員、心痛で魂が揺すぶられ、人格がきしみました。意識が朦朧とするなかで、救急車に搬入される直前に一平が最後に残した言葉は「朋ちゃんを一人残しては逝かない」だったそうです。一平の痛恨の想いを和らげてやるために、家族として何かしてやりたいと相談をして、お通夜・葬儀を準備する過程で、彼の追悼集を作成することを決めました。お通夜、葬儀だけで五〇〇名以上の上司、先輩、同僚、後輩、友人、知人の方々が参列して下さいました。残された家族四人で、二〇一九年二月二七日に『よっ！追悼集～　米田一平の三八年間の歩みと想い出～』を発行しました。この追悼集に、家族、親族以外で四九名もの方々が心のこもった文章を寄せて下さいました。この追悼集のために、私自身は「一平への最初の手紙」を書き、その最後で以下のようなエールを送りました。

「一平の三八年間の人生は、自らの魂の赴くがままに、自由に自己を表現した人生だったのでしょう。それが、多くの人々に支えられた幸せな人生だったことは疑いありません。だからこそ、『胸を張って天国につき進め』というエールでお前を送り出したかったのです。親父のメッセージは届いたはずだよね。

死の直前まで、自分らしく、幸せに生きたお前の人生を肯定できるからこそ、今はその急逝が口惜しくてたまりません。わたしの分身だった一平に、合掌！」

一平の突然の死に直面し、あらためて家族とは何なのかを考えるようになりました。私と町子さんとの夫婦関係は、家族というより、人格を認め合った共同生活者であり、志しを同じくする同志の関係です。もともとは他人であるのだから、お互いが分身であるはずはありません。お互いにどうしようもないすれ違いが生じれば、別れれば済む関係です。でも、息子・娘は血のつながった存在であり、彼らは親にとっては分身であり、私自身は、一平がこの世からいなくなって、自分の肉体と魂の1／3を奪われた感覚をもちました。自分の分身であったはずの息子を、親としてどれだけ理解していたのか？　理解を深めるためにどれくらい努力してきたのか？　研究や社会活動ではヒューマニズムを原点においていたはずなのに、忙しさにかまけて、自分にとって一番大事な存在を理解するための努力を怠ってきたのではないか？　そんな悔悟の念に今も囚われています。家族とは本質的に親子関係ではないのか？　三人兄弟の末っ子で、母親っ子であったにもかかわらず、父親だけでなく母親の死に際しても涙を流さなかった自分の人格、これまでの生き様を、息子の死を契機に問い直そうと考えています。

※続きは会報81号に掲載いたします。

え、あの先生が　シリーズ㉝

経済学部教授　伊藤　篤

二〇二〇年四月に、経済学部に着任いたしました伊藤篤（いとうあつし）です。二〇二〇年三月に退職された佐藤文博先生の後任として、統計・情報論部門に属し、「入門ＩＣＴ演習」「ＩＣＴスキル」「ＩＣＴ応用演習」「システムデザイン」「特別講義Ⅱ」「演習」を担当しています。

中央大学着任以前は、四十年近く前になりますが、大学院修了後ＫＤＤＩ（当時はＫＤＤ）に入社し、主に研究所でネットワーク関連技術の研究開発を担当した後、二〇一四年に宇都宮大学工学部に移りました。これまで、ずっと工学の分野にいましたので少々不安なところもありましたが、部門の皆様や山﨑学部長はじめとする先生方、事務の皆様に助けられ、経済学部の雰囲気にもだいぶ慣れてきたところです。

ただ、着任時からコロナ禍となり、その影響でリモート授業が続いているため、実は多くの先生方と直接お目にかかったことがありません。二〇二二年度は、皆様にお目にかかるのを楽しみにしております。

学生時代にワンダーフォーゲル部に所属していた関係で、登山やトレランを趣味としています。このほか、高尾の森づくりの会というところに所属し、高尾山の北側で間伐・植林のボランティアもしています。中央大学多摩キャンパスは、緑が豊かで、小さな丘や林があちらこちらにありますので、個人的には馴染んでいます。

研究としては、ＩＣＴやＡＩを応用することで生活が豊かになることを目指した研究開発として、日光戦場ヶ原における観光案内アプリ、自動車ドライバの感情推定、牧畜や魚養殖の高品質化などを手掛けています。

最近は、ＩＣＴ／ＡＩが流行りですが、これまでの経験では、大きな技術がものになるには、十～二十年という時間が必要で、これは、昔も今も、それほど変わっていないように思います。たまたまゲーム機のおかげでＧＰＵが安くなり、その恩恵を受けてＡＩが実用可能になってきたというめぐり合わせがあったわけですが、そのあとに来ると言われる量子コンピュータは、まだまだ時間がかかりそうです。学生の皆さんには、目先にとらわれず、情報技術の本質を理解してもらいたいと考えています。

編集後記

この後記を記している段階では、新型コロナは終息しつつあるようです。この傾向がこのまま続いてくれるよう切に祈っております。

今の一年生、二年生が経験している大学生活はほぼオンライン授業だったのでしょうが、来年度はウィズ・コロナを意識しつつも、ぜひ緑あふれる多摩キャンパスでの学生生活を満喫してもらいたいものです。

さて、本号では本会の常任幹事でもある米田先生に、公開記念講演に代えて寄稿していただきました。今回に続く「(3) 第二の人生の模索」は次号に掲載いたします。ただし、次号はＨＰでの掲載のみとなります。

（幹事長　濱岡　剛）

経済学部創立百周年記念奨学金へ募金のお願い（目標金額　六〇〇〇万円）

学生のキャリア形成を金銭面から後押しする「経済学部創立百周年記念奨学金」の原資が、三年後にも尽きようとしています。

経済学部創立百周年に寄せられた篤志から創設され、以来十年間で約二百名の学生を後押しし、各々が大きな成果を挙げてきた本奨学金を、これからの学生たちにも同様の制度として継続したく、現奨学金への追加という形で皆様の支援を賜りたくお願い申し上げます。

募金方法や税制上の優遇措置など、詳しくはWEBサイトをご覧ください。中央大学ホームページの経済学部トップから黄色のバナーをクリック。スマホはQRコードから。

2021年12月10日　第80号
発行　白門経友会常任幹事会
編集　白門経友会編集委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1
中央大学経済学部内
URL：www.wg-keiyukai.com
Fax：042-673-3425